

## 報道の立場から見た原発事故と放射線

ラジオ福島アナウンサー  
菅原 美智子 先生

“未曾有”という形容詞がつけられた「3.11東日本大震災」から3年になろうとしている。日本を震撼させた惨禍は次第に忘れ去られようとしているのではないだろうか。

2万人以上の尊い命を奪った震災で、福島県においては、地震、津波、原発事故、風評被害と4重苦にくるしめられている。東京電力福島第一原子力発電所の事故により放射能汚染でいまだ多くの県民がふるさとに帰ることができず県外や県内の応急仮設住宅で不自由な生活を強いられている。ふるさとを避難区域が設定されている11の市町村は年間の積算放射線量に応じて3つの区域に再編された。20ミリシーベルト以下は「避難指示解除準備区域」、20ミリシーベルト超～50ミリシーベルト以下は「居住制限区域」50ミリシーベルト超は「帰還困難区域」にエリア分けされた。住民はこの3つの呼称についてもふるさとがこんな風に呼ばれることに憤りを覚える人もいるし、ふるさとに帰りたい。ふるさとを取り戻したい。これが福島県民の思いなのだ。小さな子供を持つ親や家族の健康への不安は払しょくされず、いまだ家族がバラバラに暮す人々は故郷を遠くに望みながら個人では抱えきれない気持ちが入り乱れ社会の大きな問題を背負わされながら闘っている現実がある。

2011年3月11日午後2時46分この日、私はニュース担当であった為、ワイド番組の中の2時52分のニュースを読むため原稿を手にマイクの前に座ろうとしていた。

その時スタジオが揺れたのです。ワイド担当アナウンサーが「地震です。身の安全を確保してください」とアナウンス。その声とともにスタジオが揺れる音をマイクが拾いはじめさわさわと小さな振動音が徐々に大きくなっていき、まもなくたたきつけるような音がして次第に揺れは大きくなって、振幅を増す中建物全体が音をたてる。そして地震発生から5分後2時51分津波警報の発令を報じる。「現在津波警報が・・・福島県は大津波の津波警報が出されております。」と放送。ワイド担当アナウンサーは海岸付近の住民に避難を呼びかけ、その意味は重みを増していく。「福島県の津

波到達予想時刻。いわき市小名浜で今日午後3時半。相馬市で3時40分です。ただ津波は到達予想の時刻より早く到達する可能性があります・・・。

そして、この時からラジオ福島は350時間14分、震災報道連続生放送を続けたのです。

しかも民間放送局としては生命線ともいえるCMを一切放送しない番組編成とした。

余震が続き不安を抱えながらスタッフはラジオの使命を果たすべく限られた人数で必死に情報を集めた。

地震発生後、避難指示が最初に出されたのは、3月11日21時23分。福島第一原発から半径3キロ以内の住民に対してだった。3月12日5時44分、一号機の中央制御室で放射線量が上昇したことから、避難指示区域は半径10キロ圏に拡大。福島第2原発でも1、2、4号機が冷却機能を失い原子力緊急事態宣言が、第2原発にも拡大された。

3月12日15時36分第一原発で水素爆発。県が設置した災害対策本部がある福島県庁へ記者を派遣し随時入ってくる原発の情報を伝えた。さらに福島市内の状況を伝える班、沿岸の様子を伝えるため相馬方面へ向かうスタッフ。スタジオに残った私は男性アナウンサーとともに刻々と入ってくる情報の放送に専念した。しかし原発の事故に対して恥ずかしながら全くと言っていいほど備えがなく自分も含め記者も初めて聞く専門用語を放送しながら学んでいくという、現場で知識を増やしていくことになってしまった。

ラジオ福島での放射線に関する最初の解説は3月12日16時台にTBSのスタジオ化学記者・崎山敏也さんがパーソナリティに対して話す様子をそのまま放送するもので、福島の放送現場ではラジオ福島でも独自の解説者が必要と考え、お願いしたのが、県の放射線健康リスクアドバイザーを務める長崎大学の山下俊一教授。また毎日新聞福島支局長と東京本社化学環境部長を歴任した斗ヶ沢秀俊さんだった。

あまりにも放射線について無理解だった私たちにとってわかりやすいように話しかけてくれる山下先生、斗ヶ沢さんの声は不安を取り除いてくれる唯一のもの

だった。

しかし原発事故による放射性物質への不安はいまだに根強く、リスクを適切に伝えるリスクコミュニケーションのあり方を国は初期段階で失敗しており、今後はしっかりと考える必要がある。原発事故後の混沌とした中で誰の言葉を信じればいいのか特に小さな子供を持つ母親の心配は計り知れない。放射能、放射線について県内では勉強会、シンポジウムが開催されている。

しかし今だにこんな事が起きている。一般社団法人社会的包摂サポートセンターの「よりそいホットライン」にはこの一年間で福島県から13万件の相談の電話があったそうだ。「放射線のことをほかに相談できる人がいない。家族に言うと反対の意見ばかりで苦しい」などの内容もあるそうだ。時間が経過すればするほど抱える問題は根深くなるようだ。またあるお母さんの経験談では「あなたは〇〇にいたんでしょう。外に出ないほうがいいんじゃないの。」他人と接触してほしくない、まるでバイキンマンのようにあつかわれた。さらに初孫が生まれたおばあさんが初めて赤ちゃんを抱きあげると、「放射能が移るから抱っこしないで！」県外から嫁いできたお嫁さんにいわれた一言。おばあさんは涙が止まらなかったそうだ。生活の一場面でも言い過ぎではないかと思われるほどの状況がいまだにあることを忘れてならないのだ。なぜこの時期においても過剰と思われるほどの言葉が出てくるのか、それは国や東京電力に対する不信感であり、データを踏まえた科学者の言葉もリスク評価も信じられない、日本には危険リスクを回避するために疑うという気質・土壌があるためなのかもしれない。

常日頃通信メディアはネットとの融合が図られるようになってきているが、ネットとの連動を図るためラジオ福島のスタジオには急遽、震災特設サイトと震災情報センターが立ち上げられた。

阪神大震災の時とは比較にならないくらい進歩したインターネット。刻々と寄せられるメールはアナウンサーがその場で確認できるようになっており、ツイッターの活用も進んでいた。そうすることによって、入って

きた情報はすぐに放送に乗せられるが、場合によっては不確かな情報や聴いている人をいたずらに不安にさせるようなメッセージも電波にのることがある。放送とインターネットとの整合性が取れないことが出てくる心配があるのだが、ラジオは独特の、作り手と受け手の距離感、リスナーとパーソナリティーが近い分信頼関係に成り立ったものがあり大きな力となった。情報の多くはライフライン、命をつなぐ情報で、「娘の薬が2日分しか残っていない。処方してくれる病院はないか。」15分もたたないうちに「同じ薬を持っています。でもガソリンがなく届けられません。」すぐのメールに「中間地点に住んでいます。私が運びます」さらに親や知人の安否確認。「〇〇さん生きていますか。私は〇〇にいます。」リアルタイムで「生きています！」など心と心をつなぐ、それは生きる希望として県内はもとより世界を繋いだ。

地震による津波、そして原発事故、放射能との葛藤、あの日原発事故さえなければ、もしかしたら立ち入りを禁止される前に助けられる命があったかもしれない“原発事故さえなければ”という言葉は何度聞きたらいいだろうか。震災関連死、家族の分断、コミュニティの崩壊、ストレスを抱えることによる健康被害、原発事故からの立ち上がりはゼロからではなくマイナスからののだ。これから原発に頼らないエネルギーのつくり方、使い方が課題になっていくのだろう。その時福島県は先駆的に再生可能エネルギーを考え、環境に負荷をかけない美しい故郷を取り戻せるよう邁進していくことが必要であろう。

取材していて忘れられない言葉がある。ある仮設住宅にいる84歳になるあるおばあさんが、訪ねてきた中学生に言った「人を恨んで生きるなよ。」という言葉。今自分たちが置かれている状況を誰かのせいにするのではなく、しっかりと自己を確立して欲しいという思いなのだろう。少しづつ復興に向かっていっているように見える福島であるが、心の復興には一人づつ丁寧に向かい合わなければならない。福島を忘れないで欲しい。

平成25年12月2日